

教室から地域社会への生涯学習プログラムの発信 —教育学部生涯教育学専修科目「社会教育実習」の成果—

雪嶋 宏一

1. はじめに

早稲田大学教育学部教育学科生涯教育学専修では1年生の必修科目として「社会教育実習」を設置している。この授業は社会教育主事資格科目の一つであるが、新入生に対しての社会教育、生涯教育学、生涯学習を学ぶための導入科目と位置づけられている。導入科目ではあるが概論的な内容ではなく、「社会教育」あるいは「生涯教育学」という学問に関する知識がまだほとんどない新入生が、クラスでのディスカッションや社会教育施設の見学、グループワークとプレゼンテーションを通して実践的に「社会教育」、「生涯教育学」を学習する科目である。

2010年度の全国社会教育職員養成研究連絡協議会（社養協）の調査によれば、社会教育職員の養成を行っている全国の大学151校のうち、「社会教育実習」を開講しているのは42校であるという¹。また、2011年度からの社養協の調査では「社会教育実習」を3年生からの配当科目として設置している大学は39校のうち半数以上あるが、早稲田大学のように1・2年生の科目として設置している大学も4割近くあるという²。このように、大学で「社会教育実習」の科目の位置づけが異なっている原因は、文部省生涯学習審議会社会教育分科審議会が1996年4月24日に出した報告書「社会教育主事、学芸員及び司書の養成、研修等の改善方策について」において「社会教育主事養成科目の改善」の表で示した「社会教育演習、社会教育実習、社会教育課題研究」科目の「ねらい」が「専門的な知見を踏まえた実践的な能力の向上及び学習者とのコミュニケーション能力の向上を図る」とあり、「内容」については「社会教育計画の講義と対応した形で行う」とするのみで、「社会教育実習」の具体的な内容を明示していないためであろう³。

本稿では、生涯教育学専修における「社会教育実習」の開設と発展の経緯をたどり、この授業の位置づけについて確認し、そして、現在筆者が担当している「社会教育実習B」と「社会教育実習C」の概要と、グループワークによる生涯学習プログラムの作成と成果について報告し、現状の課題について述べてみたい。

2. 生涯教育学専修における「社会教育実習」の成立と発展の経緯

教育学部教育学科生涯教育学専修の前身は社会教育専修である。社会教育専修は、日本の戦後政策の中で制定された教育基本法のもとに1949年に公布された社会教育法に基づいて新たな社会教育を進めようとした文部省の要請に応じて、1952年4月に早稲田大学教育学部教育学科に設置された。わが国における社会教育専修課程設置の嚆矢である⁴。社会教育専修は2004年度から「生涯教育学専修」に名称を変更して現在に至っている。

社会教育専修が必修科目として「社会教育実習」を開講したのは昭和59年度（1984）である。当時の社会教育主事講習等規程（昭和26年6月21日文部省令第12号）には社会教育主事資格科目として社会教育実習は取り上げられていなかったことから、早稲田大学で先進的に設置された科目といえよう。昭和59年度の教育学部『講義要項』ではこの科目の概要を次のように説明している。

社会教育実習

社会教育の理論を学ぶにあたって、社会教育の現場の基本的認識が不可欠である。社会教育実習は、そのための作業として、オリエンテーションを含みながら、地域の現場学習（行政、運動、施設、学級、団体等）を、できるだけグループ別に行いたい⁵。

とあり、社会教育の現場をグループ単位で見学して実地に学習するものであった。担当教員は朝倉征夫、大槻宏樹、高橋勉の3先生である。同年度の学部要項によれば、この科目は1年生の半期1単位の必修科目であるが、社会教育主事資格の科目ではなかった⁶。つまり、社会教育専修では社会教育主事資格科目とは別に、学生に対して社会教育に関して実践的な理解をより深めさせようとして設置したもので、学生へのより丁寧な対応であったといえる。

社会教育実習が社会教育主事の資格科目になったのは昭和63年度（1988）からである。それは、その前年の62年（1987）2月10日の文部省令第二号によって「社会教育主事講習等規程」第十一条「社会教育に関する科目の単位」の第一項にある科目の改正が行われ、「社会教育演習」が「社会教育演習、社会教育実習又は社会教育課題研究のうち一以上の科目」に改正されて選択必修科目の一つとなり、昭和63年4月1日から施行されることになったためであった⁷。当年度の担当教員は中田スウラ先生であり、科目を次のように説明している。

社会教育実習（前期）

社会教育の理論を学ぶにあたって、地域の中で展開されている生きた社会教育活動の展開場面に関する基本的認識は不可欠である。

種々の社会教育活動・学習活動は、具体的な日常生活の実態に対応して営まれ、更に、それを可能とする為のシステムによって支えられている。こうした社会教育の現場の活動に関する

学習を、オリエンテーションを含みながら、行政、運動、施設、学級、団体等の多方面からアプローチしつつ、進めていく⁸。

つまり、それ以前からの科目の内容を継承するものであった。授業自体も前期1単位の実習科目であることは変わらなかった⁹。

社会教育実習が半期科目から現行の通年2単位の科目になったのは1994年度であった。当時の担当教員は矢口徹也先生であった。当年度の講義要項で次のように説明している。

社会教育実習（A・B）

社会教育を学ぶためには、それぞれの地域で進められている住民の社会教育活動への具体的な理解が不可欠である。社会教育活動・学習活動はひとびとの生活に対応して営まれ、さらにそれを可能とする関係によって支えられている。オリエンテーションを含みながら、行政、職員、施設、学級講座、運動、団体などの各方面から社会教育の実際について考えたい。また、実際に施設見学等を行う。

レポート、見学後の発表、出席状況によって評価する¹⁰。

つまり、従来の科目の枠組みを維持しながらより幅広い社会教育活動の具体例を取り上げて、施設見学等を行う内容である。科目を通年2単位に充実した理由は、前年度までに履修者が100人以上になって半期での実習指導が難しくなってきたからであったという。そのため、通年科目としてA、Bの2クラスに分けて、クラス制で学生に丁寧な対応をしていこうとするものであった¹¹。

その後、2003年度からクラスが7クラスに増設されて少人数クラスとなり、担当教員の専門性を生かした教科内容になった。そして、2007年度にA、B、Cの3クラスとなり、1クラス25～30名程度のクラス編成となって現在に至っている。つまり、早稲田大学教育学部では社会教育実習を開設した当初から新入生のための導入科目として設置され、学生への丁寧な対応として科目充実とクラス編成を変更しながら継続してきたのである。文部省の社会教育主事資格科目の改正を根拠として設置したわけではなく、早稲田大学で独自に発展させてきた科目であるといえよう。現在、生涯教育学専修の科目として開講しているが、科目名については資格科目の一つであるため、「社会教育実習」という科目名は変更していない。

3. 2008年度からの「社会教育実習B」と「社会教育実習C」

筆者は2008年度に生涯教育学専修に准教授として着任し、初年度より「社会教育実習A」、「社会教育実習B」、「社会教育実習C」の3クラスうち「社会教育実習B」（以下「Bクラス」とする）、「社会教育実習C」（以下「Cクラス」とする）を担当して現在に至っている。ちなみに、「社会教育実習A」は坂内夏子教授が担当されているため、本稿で言及するのはBクラスとCクラスについて

のみである。以下、筆者が取り組んできたこの授業について概要をまとめてみよう。

筆者は早稲田大学図書館職員であった1994年度から教育学部非常勤講師として図書館司書資格関連科目「図書館学Ⅲ」（書誌解題）およびその後継科目である「図書館学Ⅴ」、さらに「図書館資料論」（いずれも通年4単位）の2科目を担当していた。これらの科目は2012年度のカリキュラム改正に伴って「図書館学Ⅴ」は「専門資料論」, 「図書館資料論」は「図書館情報資源概論」に受け継がれた。図書館での実務と教室での学生指導の経験を踏まえて、生涯教育学専修で社会教育実習を担当する際に、前期には図書館を含めた社会教育施設の見学を中心とした実習、後期にはグループワークを中心としたワークショップ形式の実習で構成しようと考え、以下のようなシラバスで授業を行ってきた。

3.1. 前期（現在は春学期）の授業

前期には教科書を使用して生涯学習について全般的に学びながら¹², 学籍番号順に4名あるいは5名ずつのグループを作って毎回の学習テーマについてグループディスカッションを行う。ディスカッションの結果はグループ毎に発表する¹³。そして、4月から7月の毎月1回ずつ社会教育に関係のある施設の見学を行う。見学の前の週に事前学習を行って、関連する法令や施設の概要を説明して、見学での課題を与えてインセンティブを高めている。事後の週では見学での課題について全員で議論して、見学の感想を交えてふりかえりを行っている。

着任した当初の見学先はいずれも学内の施設であった。4月は早稲田大学中央図書館, 5月は平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）¹⁴, 6月はエクステンションセンター¹⁵, 7月は會津八一記念博物館としていた。4月に中央図書館の見学を行っている理由は、新入生にできるだけ早く図書館の利用に慣れて、大学での学習方法を知ってもらうためである。図書館勤務の経験を生かして筆者が館内を巡りながら施設と利用法を説明していた¹⁶。その他の施設についてはそれぞれの職員や助手あるいは助教の方に説明をお願いした。見学毎に学生には見学の経緯とそれぞれの施設が果たす生涯学習上の役割について小レポートを必ず課している。ところが、2012年度から見学先をやや変更して、4月中央図書館, 5月WAVOC, 6月に学外施設である新宿区立戸山図書館¹⁷, 7月に會津八一記念博物館としている。新宿区立戸山図書館を見学先に選んだ理由は大学直近の公立図書館であり、授業時間内に徒歩で往復して見学することが可能であることと、新宿区の障害者サービスの拠点館であるという特徴があることである。このようなディスカッション、施設の事前学習、見学、振り返りをBクラス、Cクラスで並行して行っている。

前期の学習のまとめとして、夏季休暇中に居住地域にある最寄りの社会教育施設を受講者が自らアポイントメントを取って訪問し、施設の職員に直接インタビューして、社会教育施設の概要、活動、課題などをレポートにまとめる課題を課している。学生にとっては施設の職員にインタビューすることも、社会教育活動の実際を知ることもほぼ初めての機会であるため、事前調査、訪問日時の決定から、質問内容にいたるまでしっかりと準備するよう特に注意深く指導している。ほとんど

の学生はしっかりと準備をして施設を訪問して、職員にインタビューして施設の概要と課題などを聴取してレポートにまとめている。中には、職員から社会教育への情熱のこもった話を聞いて感激して、学習へのモチベーションを高めてくる学生もいる。

3.2. 後期（現在は秋学期）の授業

後期の最初の授業ではグループ単位で夏季に作成したレポートを相互に発表し合って、グループ内で情報共有を図っている。当初はそこでそれぞれの施設の問題点を議論してグループ発表につなげていた。しかし、グループのメンバーの訪問先にもばらつきがあり、レポートの出来にも精粗が相当あるため、まとまりのあるグループ発表にすることがなかなか容易ではなく、学生の反応も芳しくなかった。そのため、2012年度から個人発表に変更して、各自レジュメを作成して発表することにした。プレゼンテーションの意義とレジュメ作成方法、発表の基礎的なスキルを指導することになっている。それと同時に、発表を聞いている学生には4項目の評価項目を設けてそれぞれ1（悪い）～4（とても良い）の4段階で評価を行う評価シートによって他者評価を行うことにしている。評価項目としては、「発表内容」、「発表態度」、「レジュメの出来」、「発表を聞いてその施設を利用したいか」という4項目である。これら4項目にした理由は、多くの学生にとっては初めての個人発表であるため、どうしたらうまく発表できるのか不安であるので、クラスメイトの発表をわかり易い項目によって評価することで、発表方法を学んでもらうためである。発表の評価は全員の発表の終了後に全員の評価シートを集計して評価ポイントを学生に提示し、評価が最も高かった学生のよかった点を説明している。このような他者評価を行うことでどのような発表をすればよいのか学生自身がおのずと学習する機会となり、発表スキルの向上が期待できる。

個人発表終了後の11月からは、生涯学習プログラムに取り上げるジャンル別に新たなグループを編成して、新メンバーによって生涯学習プログラムの策定に入る。テーマは、健康・スポーツ、社会問題、家事・しつけ、多文化交流、防災、ICT、ボランティア等に大きく分けて¹⁸、個々の学生が関心のあるジャンルを第2希望までを選択してもらっている。なるべく希望に沿うようにして3～5名からなるグループを編成している。中には人数が集まらずグループが成立しないジャンルがあることもある。その場合には学生の同意のもとで他のジャンルのグループに入ってもらうことにしている。学生の希望は流行や社会の変化に大きく影響されており、学生の関心が毎年のように変化していることが見て取れる。こうして、B、Cクラスとも各6グループを編成して、合計12グループがそれぞれ独自に学習プログラムの作成を行っている。その際に最初に学生に提示している条件は以下の通りである。

1. 新宿区立戸山図書館あるいは新宿区内を会場にして開催できること。
2. 新宿区が公式に行う成人向けの生涯学習活動であること。
3. 若者（20～30歳代）も参加したいと思うようなテーマと内容であること。

そして、前期の授業で社会教育計画について学習した際に利用した国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが公開している計画シート等に基づいて¹⁹、具体的な学習プログラムを構成するために必要な項目を導き出して、以下のような項目について検討して実施可能なプログラムにするよう指導している。

1. わかりやすく親しみやすい事業名
2. 主催者（仮名）
3. 学習テーマ
4. 学習目標（どの程度までやるのか）
5. 参加対象者（具体的に設定）
6. 開催回数（2週間に1回程度で5回以上）
7. 開催月日・時間（来年度の具体的な月・日・時間）
8. 開催場所（新宿区内の開催可能な場所）
9. 毎回の学習内容、講師・支援者等、学習方法（参加型学習を必ず取り入れる）
10. 発表用のレジュメ²⁰
11. 広報戦略、ポスター、チラシ、Web ページの例

さらに、次の4点の学習条件を組み込むよう求めている。

1. 学習プログラムは一つのテーマのもとに展開するものであること。
2. プログラムは全5回以上の講義や実習から構成すること。
3. 第1回目から段階的に学習内容のレベルを上げていくこと。あるいは大まかな概念から専門的な内容に移っていくことと。
4. 必ず参加型学習を盛り込むこと。

このような項目について6週にわたって作業を進めて、事業名、学習テーマ、学習目標等の項目を検討して、プログラムを具体化し、発表に必要な資料を完成させていくのである。グループによっては議論の途中でテーマが二転三転して大きく変更されて、当初予想もしなかったような内容のプログラムが作成されることもある。

学習プログラムの発表はPowerPointで行うため、コンピュータ教室を使用してグループ毎に作業してスライドを作り、PowerPointのリハーサル機能を使って発表時間を調整し、発表会で配布するレジュメとチラシを準備する。こうして冬季休暇に入る直前の12月最後の授業でグループ発表を行っている。発表は各グループ10分以内で行う。発表を聞く側は評価シートで採点する。評価項目は「説明、速さ、身振りはよかったか」、「発表時間は守られていたか」、「テーマについてよ

く調べていたか」、「発表内容が理解しやすかったか」、「プレゼン資料はよくできていたか」、「レジュメはよくできていたか」、「この講座に参加してみたいと思ったか」の7項目であり、それぞれ1点（悪い）から4点（とても良い）で評価シートに記入して、ポイントを数値化している。

年明け最初の授業でポイントを集計してクラスごとに上位の作品を発表して講評を加え、優秀作品を決定していた。2008年度から2011年度までは学習プログラムはあくまでシミュレーションとして作成して、実際に社会教育施設などで実施することはなかった。

2008年度から2015年度までに100件近くの学習プログラムが作成されている。例えば、2014年度には次のような事業名のプログラムが発表された（カッコ内は選択したジャンル）。

1. 第2の人生のススメ：これからの暮らし講座（教養・社会問題）
2. スポーツ吹き矢で健康に！（健康・スポーツ）
3. 新聞のミカタ（教養・社会問題）
4. そうぞう性を育む：三つ子の魂百まで（家庭生活・子育て）
5. アジアを知る：多文化理解（多文化理解）
6. 新宿区子育てサポートクラブ（ボランティア活動）
7. タッチラグビーから学ぶ老化予防：老化防止の優しい競技を通して（健康・スポーツ）
8. ジモトノミカタ！大切な人を守らネバダ！（防災）
9. 大事なものは、そこにある～THINK OF FOOD～食生活を考える（健康・スポーツ）
10. 育メンになろう！（家庭生活・子育て）
11. 神楽坂を歩こう（多文化理解）
12. 首都直下地震に備える（防災）

そして、年明け1月の授業では社会教育に関する最近の話題や課題について論じている論文を2、3点選択して学生に文献を提示してグループで議論して発表する。そして、最終授業で1年間の振り返りを行って授業を締めくくっている。その際に、作成した生涯学習プログラムを実際にやってみたいという声が2011年度までに複数の学生から上がっていた。

4. 新宿区立戸山図書館における生涯学習プログラムの実施について

自分たちが作成した生涯学習プログラムを実際に実現してみたいという学生の声に対応して、2012年度に大学が所在する新宿区内で学習プログラム実現できないものかと授業での見学先である新宿区立戸山図書館の大城澄子館長に相談したところ、連携してやってみましょうということになった。戸山図書館ではそれまでも盛んに学習プログラムを企画して実施していたため、学生の作品の実現に非常に積極的であった。

そして、2012年度からは学習プログラム作りの最終段階で実現性の高い作品に仕上げるために

大城館長と戸山図書館の館員諸氏を教室にお招きして、学習プログラムの作成について学生を指導していただき、12月の最終授業は戸山図書館と同じ建物内にある新宿区立戸山生涯学習館1階ホールを利用して、BクラスとCクラス合同の発表大会を行うようになった。普段別々のクラスで学習している2クラスの学生が一堂に会すると、学生はしっかりと発表しようという気持ちが高まり、さらに学外での発表ということで学生の気持ちが自ずと引き締まっていい緊張感が漲ることになる。発表時間は従来通り10分であるが、レジュメを事前に配布して、グループ全員が必ず発表するようにしている。グループの発表の順番は発表大会の冒頭でくじ引きによって決めている。そして、全グループの発表終了直後に最優秀賞2作品を戸山図書館のスタッフと協議して決定し、その場で大城館長から賞状を授与していただいている。最優秀作品は戸山図書館の次年度の事業計画に取り入れていただき、予算に見合った規模に学習プログラムの構成を改訂して、企画した学生が主体となって実施することになっている。実際、2012年度から最優秀作品を戸山図書館生涯学習講座として実現している。これまでの4年間に7つのプログラムの開講が実現しており、企画した学生は講座の講師となったりファシリテータとなって、生涯学習の企画・運営を体験して、貴重な経験を得ている。

4.1. 2012年度の成果

これまでに最優秀賞を受賞して実際に新宿区立戸山図書館で実施されることになった学習プログラムについて紹介しよう²¹。

2012年度には「新宿力を体感する街歩き—地下街に行く—」と「実践から学ぶインターネット講座」が最優秀賞となり、社会教育実習で制作されたプログラムとして2013年度に初めて実現した。

「新宿力を体感する街歩き—地下街に行く—」は2013年6月9日（日）に実施された。学習目標は新宿の地下街を歩いて新宿を再考・再発見することである。新宿駅周辺の地下街を会場にして、午前と午後の2回に分けて行われた。10:30～12:00は新宿駅東口コース、13:00～15:00は西口コースとした。東口コースの参加者が7名、西口コースの参加者が13名であった。学習内容は、早稲田大学創造理工学部講師の松本泰生先生に講座の講師をお願いして、新宿の地下通路の構造、都市計画の関係、歴史的背景、地形的特徴などを解説していただきながら歩くものであった。質疑応答も活発で参加者からは「新しい発見があって良かった」、「大変楽しかったので、また是非街歩きの企画をやって欲しい」などの感想があり、好評であった。

「実践から学ぶインターネット講座」は2013年8月24日（土）に実施された。学習目標はパソコンを使用して楽しみながらインターネットに慣れることである。講座は10:30～12:00と13:00～14:30の2回で、午前、午後とも内容は同じで、定員20名のところ午前コースの参加者が5名、午後コースの参加者が8名であった。参加者は30歳代から80歳代の幅広い年齢層であった。当日に4名のキャンセルがあったことは残念であった。会場は西新宿にある新宿区産業会館BIZ新宿

の3階のパソコン研修室を借りることができた。講師は企画した学生2名が務め、パソコンの基礎、インターネットの歴史、役割、危険性と安全な利用法、SNSの機能と参加方法であり、twitter/face book、ネット博物館、新書マップ、乗換案内などのサイトを閲覧して実践的な学習を行った。参加者からは「歳をとり、周囲の人との繋がりが薄くなっていくからこそ、インターネットを上手に利用していきたい」、「前にPC教室へ行ったときよりも勉強になった」、「新宿区の図書館は他区（千代田区など）に比べて、インターネットが利用できるPCが極端に少ない。戸山図書館にも増やして欲しい」という声が寄せられた。インターネットについて学ぶ機会が限られている現状や新宿区立図書館のPC環境の問題点をよく認識している受講者の思いが感じられた。

4.2. 2013年度の成果

2013年度の最優秀賞は「日中韓友好ワークショップ」と「わせるみ」であった。前者は多文化理解を目的としたもので、後者はボランティアで公園にクリスマス・イルミネーションを行おうという企画であった。残念ながら後者は予算が相当にオーバーすることが判明したため実施計画には取り上げないことにした。そのため、2014年度の戸山図書館の学習プログラムとして採用されたのは前者1件のみであった。

「日中韓友好ワークショップ」は2014年5月25日（日）に実施された。学習目標は、外国人居住登録者が23区で最も多い新宿区で様々な文化を背景とした人が身近なテーマについてフリートークで多文化交流を図るものである。学習内容としては、10:00～12:00に大久保地域センター会議室で、各国のおすすめの食べ物、人気の俳優やアイドル・ドラマ、人気のデートスポットやプロポーズ・結婚式、おすすめの見光スポットの4つのテーマでそれぞれの国の事情をフリートークして相互理解を深め、13:30～15:30からNPO東京シティーガイドの二川昌弘氏のガイドで新大久保周辺を歩き、コリアンタウン、イスラム横丁、媽祖廟、ソムオー、皆中稲荷神社を訪れて異文化を体験するものであった。参加者は15名で、アンケートに答えた方全員が「良かった」と回答しており、「韓国以外の国の話も聞けた」し、コリアンタウン以外の場所を訪問できたことがよかったという声があった。

4.3. 2014年度の成果

2014年度の最優秀賞作品は「大事なものは、そこにある THINK OF FOOD：食生活を考える」と「第2の人生のスズメ：これからの暮らし講座」であった。前者は事業名をやや短くして「THINK OF FOOD～大事なものは、そこにある～」として2015年6月27日（土）13:00～15:00に実施した。後者は企画した学生の協力が得られなかったため、戸山図書館で企画を練り直して、「これからの暮らしの講座『高齢者介護について知ろう、考えよう、話し合おう』」というタイトルで2015年11月7日（土）14:00～16:30と同年11月14日（土）14:00～16:00の2回に分けて実施した。

前者の学習目標は、大学の学生食堂を利用して参加者と学生が交流しながら「食」について様々な観点からアプローチして「食」について改めて考える機会を提供するものである。実施にあたっては早稲田大学生協同組合と早稲田大学の学生サークル「学食研究会」の協力を得た。学習内容は、早稲田大学大隈ガーデンハウス内の早稲田大学生協の食堂で店長より栄養・味付け・メニュー開発、ムスリムの留学生向けハラル料理の話聞き、そして早稲田大学の学食をはじめとして全国の大学の学食が日々進化している様子について学食研究会から最新の事情を報告していただいた。そして、学食体験として学生が食べているメニューを食した後、トークセッションを行い、食材、味付け、産地、カロリー消費、食べ方、食の背景にある食文化について話し合っ理解を深めた。参加者は要予約の新宿区民12名とその他地域の1名であり、そのうち戸山図書館の行事への初参加者が8名であった。年齢層は20歳代1名、40～50歳代5名、60～70歳代7名と幅広かった。参加者へのアンケートでは13名中12名が「とても良かった」、1名が「良かった」であり、この企画が大変好評であったことがわかる。参加者からは、「『食』という人間として大切な課題であり、学食で食べることを通して、いろいろなディスカッションができた。」「心がこもったプログラムでした。カラダにも伝わりました。」「すばらしいアイデアの企画です。」等という声があった。

後者の「これからの暮らしの講座『高齢者介護について知ろう、考えよう、話し合おう』」の学習目標は介護問題について高齢者が多い戸山団地周辺の図書館利用者に対して、「老老介護」や「自宅介護」の問題を知ってもらい、状況に応じた対処について考えて参加者が意見交換する機会を作り、家族や自分が親を介護する立場になった際に役立ててもらうことである。第1日目の11月7日（土）14:00～16:00に戸山生涯学習館1階ホールで認知症と介護の問題をテーマにした映画『花いちもんめ』を上映し、第2日目の11月14日（土）14:00～16:00に新宿区若松町高齢者総合相談センターの介護福祉士である小田洋子氏に高齢者介護の実情と介護にあたる際に大切なことについて講演していただき、後半に意見交換するワークショップを実施した。開催を告げる広報が直前の11月5日発行の『広報しんじゅく』に掲載されたことで、第1日目は定員100名のところ参加者13名と低調であり、第2日目の参加者は定員15名のところ12名であった。ワークショップにおける意見交換も介護経験者と未経験者との間で知識量に差があるため議論がかみ合わない面があった。

4.4. 2015年度の成果

2015年度の最優秀作品は「日本の道～相撲で知る伝統的な作法と礼儀～」と「今、だれかを好きですか？—千年前と変わらぬ恋心—」の2作品であった。前者は2016年5月14日（土）14:00～16:00に実施し、後者は2016年6月4日（土）14:00～16:00に実施した。

前者は、多文化理解に関する学習プログラムを検討する中で学生たち自身が日本の伝統文化についてよく知らないことを認識した結果、日本の文化を改めて学んで多文化理解につなげたいという思いから企画されたものである。日本の伝統文化である「相撲」にスポットをあてて、力士や行司

の技や身のこなし、所作に込められた日本の深い心と礼について認識を深めようとするものである。最初に学生から企画の意図の説明が行われた。そして、講師にお招きした大相撲立行司第三十四代木村庄之助である伊藤勝治氏が、古代から現代に至る相撲の歴史を説明し、そして行司、呼出、床山等の舞台裏の仕事を相撲協会の映像資料を交えながら解説した。その後、伊藤氏が持参した普段見ることのできない鬢付け油、土俵の土、俵、行司の装束、軍配など実際に使用していた貴重な資料に触れる体験の時間を設けた。最後に、参加者の質問に対して伊藤氏から丁寧な回答があり、一同相撲の魅力を堪能し、伝統文化の奥行きを深さを知ることができた。

参加者の中には親子連れもあり、子どもから80歳代までの70名の参加を得た。戸山図書館の行事に初めて参加した人も14名いた。連携企画としては過去最多の参加者数であった。アンケート結果では90%の人が「とても良かった」と答えている。

「相撲の歴史の様々なエピソードが現在の決まり手につながっていて興味深かった。子ども向けの本になっても良いと思う内容だった。」「相撲のことがよくわかり、今後の観戦が楽しみになった。」「相撲ファンなのでとても興味があり素晴らしい講座だった。」「よくぞこれだけ著名な方を講師としてお招きしてくれた。感謝。」「相撲部屋の後援者だが、まだまだ知らないことがあってとても勉強になった。」「冒頭に学生から企画意図がしっかりと説明されて、講演会の趣旨が大変よく理解できた。」等という参加者の賞賛をいただいた。相撲の素人ばかりでなく、相撲を良く知っている人にとっても楽しみながら為になる講座であったことを実感することができた。

後者の「今、だれかを好きですか？一千年前と変わらぬ恋心」は、恋愛をテーマにして源氏物語を読み解いて、平安時代の恋愛観を学び、現代の恋愛観と比較することで恋愛のあり方を改めて考えてみることを学習目標にした。講師には源氏物語を専門に研究する早稲田大学教育・総合科学学術院教授の新美哲彦先生をお招きして、最初に源氏物語に登場する平安時代の貴族の恋愛の形を「雨夜の品定め」などを例にして講義していただき、後半には、講義にもとづいて、企画した学生がファシリテータとしてグループディスカッションに参加して、和歌とSNSによるコミュニケーションの違いなどの恋愛事情を比較した。また、男女の心の機微はいつの時代も変わらないという意見も出て、源氏物語を新たな角度から眺めるユニークなディスカッションとなった。参加者は40歳代から70歳代の22名で、アンケートでは「とても良かった」と「良かった」で100%を占めた。「『源氏物語』の「雨夜の品定め」に興味があり、その部分について詳しく聞けたのがよかった。」「源氏物語のミステリアスな一部をよく理解できたので大変有意義だった。」「光源氏について突き詰めて話し合えたことが良かった。」というような『源氏物語』ファンの声や、「講義だけかと思っていたが、グループワークが面白かった。学生時代に戻れた。」というようにディスカッションを楽しんだ参加が多かった。

以上の生涯学習プログラムは、新宿区の区報である『広報しんじゅく』誌上で簡単な内容紹介と参加者募集が最初に広報される。広報誌発行当日にすぐに問い合わせがあり、1日で参加予定人数に達してしまうこともあるという。区報の影響力を感ずるばかりである。参加者は戸山図書館の利

用者や新宿区民ばかりでなく、他の区からの参加者もあり、広報で講座を知った人の口コミニケーションが大きな役割を果たしていると思われる。

5. まとめと課題

以上述べてきたように、早稲田大学教育学部教育学科社会教育専修に全国に先駆けて設置された実習科目「社会教育実習」は、社会教育についてまだほとんど知識のない新入生学生に対して施設見学を行いながらより具体的に社会教育を知ってもらおうという学生への丁寧な対応として生まれたものである。その後、社会教育実習が社会教育主事資格科目となってからも、新入生の導入科目としての科目の内容と位置づけは変わることなく継承され、専修名が「生涯教育学専修」と改名されてからもなお発展的に引き継がれてきた。

このような方向性の中で筆者が2008年度以来担当しているBクラスとCクラスで後期（秋学期）のグループワークとして取り組んでいる生涯学習プログラムの作成は学生の要望も踏まえて新宿区立戸山図書館の協力のもとで地域の学習プログラムとして実施して4年が経過した。毎回実施されているアンケートには次のような参加者の感想が見られる。

早稲田の学生と図書館と一緒にやるのが魅力的だと思う。（2013年度「実践から学ぶインターネット講座」の感想）

早稲田大学生の企画で、学生と話ができたり、学書も食べられて、楽しい2時間だった。（2015年度「THINK OF FOOD～大事なものはそこにある～」の感想）

早稲田大学生の意見が聞けてとても楽しい。（2016年度「日本の道～相撲で知る伝統的な礼儀作法～」の感想）

これらのことから、近隣の新宿区民の間では早稲田大学の学生が企画したユニークな学習プログラムとして期待されて、区民と学生との交流の機会と認識されているとみなすことができよう。まだ生涯教育学の入り口に立ったばかりの新入生が企画した学習プログラムでも区民に好意的に受け入れられ、通常あまり地域住民と交流のない学生にとっても地域を知る重要な機会となっていることはこの授業の成果と言ってよいであろう。

一方、学生が作成した生涯学習プログラムを戸山図書館の学習講座として提供し実施する際に、実感した課題を2点あげておきたい。一点目は、プログラムを作成した時点では学生は1年生であり、社会教育実習が必修授業であるために作成したのであるが、それを実施する時期には学生は2年生になっており、すでに別な授業を履修していることと、1年生の時のグループのメンバーが必ずしも交流を続けているわけではなく、新たな交友関係が生まれれば、プログラムの実施に必ずしも積極的でなく、学生にとってはプログラムの実施が負担となる。実際に、グループのメンバー全員が揃って実施に協力してくれるわけではない。2015年度の「これからの暮らしの講座『高齢者

介護について知ろう、考えよう、話し合おう』の例のように学生の協力がまったく得られなかったことから、広報への情報提供が遅れて、参加人数が低調になってしまい、戸山図書館にご迷惑をかけてしまったこともあった。つまり、学生にとっては学習プログラム実施のモチベーションを維持することには努力が必要であり、必ずしも容易ではないのである。この点については学生による企画と戸山図書館による実施を切り分ける方法もあろう。

二つ目は、現代の学生たちにとって公共の社会教育施設の利用の認識は低く、そこで行われている学習講座等の情報もほとんど持ち合わせない。彼らがそのような情報を知る由もないのは、まずは施設の存在をあまり認識していないことと、施設の情報SNS等で伝わらないので知らないということである。しかし、たとえSNSで発信があってもネット上では関心のないことについては存在しないのに等しいため、実態としては知る機会がほとんどない。一方で、区民の中には日ごろから区報を読んでいる人たちが少なからずいるが、彼らの多くは年齢層が比較的高いため、学習講座に集う人たちも若者ではなく年齢の高い人々が中心になっている。授業では生涯学習プログラムを作成する際に、若者が集まるような企画と広報の方法を考えるよう促しているが²²。2016年度に実施されたプログラム「今、だれかを好きですか？—千年前と変わらぬ恋心—」は元々今恋愛をしようとしている、あるいはこれから恋愛をしたい若者たちに向けて企画されたプログラムであったが、実際に講座に参加した人々の中に若者は見られなかった。学生たちが同世代に向けて魅力的と思われるような企画をなかなか創造しえないことから、20歳代、30歳代を社会教育施設の利用者に取り込むための解決策を見出すことは相当に難しいと言わざるを得ない。なお、新宿区では公共施設の老朽化が進んでいるため、若者が好んで利用する場所にはなっていないことも大きな要因であることを言い添えおきたい。

以上のような課題を解決しながら、より幅広い年齢層の人々が楽しみながら新たな知見を学べるようなプログラムの開発が必要である。若者が多数集う大学がこのような点についての課題解決にもっと連携・協力していけば、社会教育施設に若者を呼び込んで地域社会の活性化を図ることができるのではないだろうか。

付記

本稿をまとめるにあたって、新宿区立戸山図書館館長大城澄子氏および館員諸氏から実施した学習プログラムに関する重要な資料を提供していただき大変助かりました。また、早稲田大学教育・総合科学学術院の矢口徹也教授からは過去の科目変遷について大変貴重な回答をいただきました。末尾ではありますが、これら諸氏には衷心から感謝の意を表します。

【注】

- 1 平川景子「実践力養成に向けた社会教育職員養成の課題」『社会教育職員研究』19号、2012年、p.44。

- 2 島田知明・吉見江利「社会教育実習実態調査の中間報告」『社会教育職員研究』19号, 2012年, p.37。
- 3 文部科学省「社会教育主事, 学芸員及び司書の養成, 研修等の改善方策について」, URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19960424001/t19960424001.html (参照 2016-11-2)。
- 4 大槻宏樹・米村健司「社会教育専修のあゆみ」『早稲田大学教育学部五十年』, 早稲田大学教育学部, 2000年, p.32。
- 5 早稲田大学教育学部『昭和59年度講義要項』, 1984年, p.35。
- 6 早稲田大学教育学部『昭和59年度教育学部要項』, 1984年, p.80。
- 7 文部科学省「社会教育主事講習等規程」, URL: <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26F03501000012.html> (参照 2016-10-1)。なお, この改正は社会教育審議会「社会教育主事の養成について(報告)」(昭和61年10月24日)に基づくものである(『社会教育に関する答申集IV』, 全日本社会教育連合会, 1988年, p.117-137参照)。
- 8 早稲田大学教育学部『昭和63年度講義要項』, 1988年, p.50。
- 9 早稲田大学教育学部『昭和63年度教育学部要項』, 1988年, p.79。
- 10 早稲田大学教育学部『1994年度講義要項』, 1994年, p.109-110。
- 11 筆者の質問に対する2016年9月29日の矢口徹也教授の回答による。
- 12 教科書としては, 2008-2011年度は山本恒夫ほか編『生涯学習概論』(文憲堂, 2007年), 2012-2014年度は浅井経子著『生涯学習概論: 生涯学習社会への道』(理想社, 2010年)を利用させていただいたが, 2015年度からは教科書を使用せず, 毎時間プリントを配布している。
- 13 最近のスマートフォンの発達により, その場で図書館目録, 雑誌記事索引, 新聞記事データベース, 地方自治体の情報等が瞬時に検索できるようになったため, 授業内で情報検索の結果をまとめて発表する機会を増やしている。
- 14 WAVOCの見学では, ボランティアを行っている学生団体からボランティア体験をうかがって, ディスカッションする場合と, WAVOCが開催しているボランティア・フェアを見学する場合とがあった。
- 15 早稲田大学エクステンションセンターの見学については同時限に行われている授業の参観を行わせていただいた。
- 16 最近図書館見学の時期に中央図書館では新入生のためにLibrary Weekを実施し, 館内スタンプラリーで館内の主要な施設を巡るセルフツアーが行われるため, セルフツアーに参加する形で見学を行っている。
- 17 2016年度には日程の関係で5月新宿区立戸山図書館, 6月WAVOCとした。
- 18 年度によってテーマの設定を多少変えている。2012年度は前年の東日本大震災のため, 学生の関心は防災に集まった。また, ICTも関心が高かった。しかし, 最近防災もICTも学生の関心は高くないため, グループが成立しない。
- 19 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター「社会教育計画策定ハンドブック: 計画と評価の実際」で公開されている「計画シート6」(URL: <http://www.nier.go.jp/jissen/chosa/handbook1-23.htm>) (参照 2016-11-2) などに基づいて策定したもの。また, 授業では次の資料を事例として学生に提示している。山本恒夫ほか『社会教育計画』文憲堂, 2007年, p.106に掲載された「表6-1 参加型学習を取り入れた学習プログラムの事例」。
- 20 当初はレジュメの作成はしていなかったが, 2012年度からレジュメの作成を必要条件に加えた。
- 21 東北学院大学で開講している社会教育実習では仙台市中央市民センターと連携してセンターで実務実習を行いながら学習講座を企画立案して実施してセンター, 大学, 学生にとって成果が得られた先進事例が報告されている(水谷修・今川義博「社会教育主事養成のためのプログラム開発に関する一考察: 仙台市中央市民センターにおける講座づくり実習の取り組みを例に」, 『東北学院大学論集: 人間・言語・情報』121号, 1998年, p.67-88)。筆者が行っている新宿区立戸山図書館との連携による学習プログラム開発はこの例を基にしたものではなく, 授業を行っている中で自然と生まれたものであり, 東北学院大学の事例は後に知ったものである。
- 22 この点については東北学院大学で開講している社会教育実習でも指摘されており, 実習生が若者向けの講座の企画を行っている。水谷修・今川義博, 前掲論文, p.72-74。